閉会の辞

黒柳　米司

ありがとうございました。基調講演の先生方も、コメントをいただいたお二人も、非常に慎重に時間を守っていただきましたが、すでに五時三〇分を過ぎているということで、当初予定していた時刻を過ぎましたが、何と言っても、これだけたくさん人がいて、一人も質問をする人がいない、というのも名残惜しい気がします。全学生を代表して、我こそは、ということで、しかも回答については一人一分といたします。お一方、誰かいないでしょうか。実は、質問が二通来ているのですが、一通は私に当てられたものなので、いつか講義の折にでもお話いたします。もう一通は、松下先生に対するもの質問ですが、これについては先生がいらっしゃらないということで、質疑応答が成立いたしません。

どなたかスバッと回答できるような質問のある方、いらっしゃいますでしょうか。

それでは、あまり多くの知識を詰め込んだがために、未消化な部分があるのかもしれません。お帰りになって、メモやレジュメを見直すなどしていただきたいと思います。

最後に、ひとつだけ申し上げます。このお話をつくづく考えてみますと、いわゆる「国民国家」というのでしょうか、これまで我々があまり意識はしていないまでも、常に国際社会の中で最も重要なアクターというふうに思われてきた「国民国家」というシステムがある意味で崩れかけて、その崩れかけた一方が、「地球化」「国際化」という方向に向かって大きなうねりが生じており、他方では「分権化」あるいは人間、個人の問題という形で変化しながら新しい問題を投げ

かけている。したがって、我々自身は地球時代の市民という、言ってみれば、「地球市民」とも言うべき存在として、学生でありながらも、国際社会そのものとつながっているのであるから、物を知り、発言し、行動する、というふうにならなければならない、ということを学んだと私は思います。皆さんも本日のシンポジウムの中から何事かを学んで、これからの学生生活の中に活かしていただければ、と思います。本日は長い間お疲れ様でした。先生方、長い間ありがとうございました。